全文検索

近松の時代物――双生・女夫・川中島

The drama of Chikamatsu：*twins,couples,and islands*

葛　綿　正　一
KUZUWATA Masakazu

『近松全集』（岩波書店、一九八五～九四年）の刊行、渡辺保『近松物語』（新潮社、二〇〇四年）の刊行以後、近松の時代物再評価の機運は高まっている。貧しい惹句でいえば、ハリウッド映画の傑作に匹敵するような、クリント・イーストウッドの傑作に匹敵するような作品群の読解は、しかし十分ではない。本稿では享保九年一一月に亡くなった近松晩年の時代物『双生隅田川』（享保五年八月）、『津国女夫池』（享保六年二月）、『信州川中島合戦』（享保六年八月）、『関八州繋馬』（享保九年一月）を対象として、分身、カップル、構造という視点からささやかな分析を試みたいと思う。

あらかじめ簡単に作品内容を記しておくと、『双生隅田川』は吉田行房と班女の間に生まれた梅若・松若という双子の話である。松若は天狗に攫われ、梅若は人買い惣太のせいで死ぬ。隅田川まで班女が梅若を探し求めるのが「狂女道行」である。

『津国女夫池』は足利義輝の乱行に乗じて謀反を起こした三好長慶を、義昭が討つ話である。義輝が傾城の大淀を迎え入れると、花の御所は乱れ、懐妊した御台所は津国に逃れる（「旅のはら帯」）。御台所を匿う造酒之進と腰元清滝は自分たちが実の兄妹で近親相姦を犯したのではないかと恐れるが、そこから父親文次兵衛の旧悪が明らかとなり、文次兵衛夫婦は女夫池に身を投げる。義昭が御所の栄華を夢に見るのが「千畳敷其世かたり」である。

『信州川中島合戦』は川中島における上杉謙信と武田信玄の合戦を描く。信玄の息子勝頼と謙信の娘衛門姫が恋仲になり（「ゑもん姫道行」）、それをきっかけとして謙信と信玄は確執を深める。謙信は山本勘介を味方につけるべくその

老母に取り入ろうとするが、勘介の母親は自ら死を選ぶ。勘介は信玄の身代わりとなって謙信に討たれ、両家を和睦へと導く。

『関八州繋馬』の繋馬は平将門に繋がる家紋であり、その遺児良門、小蝶が天下を狙う話である。謀反を狙い源氏に奉公するようになった小蝶は源頼信に恋をし、その恋敵詠歌姫を頼信の弟頼平に結びつける。頼平は詠歌姫と駆け落ちし（「詠歌の前道行」）、平良門と盟約を結ぶ。頼平の乳兄弟である纜は頼平を説得するために、自ら死を選ぶ。頼信への恋に破れた小蝶は怨念から土蜘蛛になる。

なお、引用は新日本古典文学大系によるが、その脚注にも多くを学んでいる。

一　『双生隅田川』を読む――分身と歴史

『双生隅田川』において重要なのは、まさに「双生」という点にあるように思われる。なぜなら、隅田川伝説に登場する梅若、松若の兄弟を瓜二つの双子に設定することがなければ、本作品は展開しえないからである。

「エお前が松若君かいの、扨も似たり、誰見ても梅若様、瓜を二つに割つたやうな」とびつくりして、驚く後に梅若君いつの間にお出共、思はず知らず顔を見て、「是は是は松若様、今の間にこちらへお廻りなされたか…」

（第一）

梅若と松若は腹違いの兄弟ではなく、ともに班女が生んだ双子ということが御台所から明らかにされる（御台所は「松若を引ずり出せ意地張らば撲て叩け女子共」と嗾ける残酷な母の一面をもつ）。双子であるがゆえに取り違いの喜劇と悲劇が生じうるのである。御台所に分身が現れるという「影の煩ひ」もまた双子の主題と重なっている。

「なふ恨めしや少将様、十年に余る妹背の中、見紛ふとは情ない」。「いや言ふな言ふな、最前より汝先に詞を出さず、跡に付いて口真似するは曲者、行房が見定めしと、御刀引抜いて息の束ねをぐつと刺し、抉るに連れて手足も弱り、うんと一声此世の限り遂にはかなく息絶へたり。

（第一）

吉田行房は偽物と間違えて本物の御台所を刺し殺してしまうのだが、真の「妹背の中」を見極めるのが本作品の主

題といえるかもしれない。実際に、後で登場する人買い惣太と唐糸はそうした夫婦に成長するからである。また「跡に付いて口真似するは曲者」という先入観が否定されるところには近松の矜恃を見て取ることができるのかもしれない。先行作を模倣するというのが、いつもの近松の方法だからである。

「愚か也行房、切たるこそ汝が女房、吾こそ比良の大天狗、住山の木を切たる恨猶尽きず」と、異形と変じ車輪の翼、松若君を掻摑み雲井を、攀ぢてぞ飛去りける。　（第一）

御台所が「影の煩ひ」にかかったのは、魔所の木を切ったことに怒った天狗のせいであった。松若は天狗に攫われ、梅若は地上を流離する。巨木が切り倒されることで、分身の戯れが始まったのである。「隠れなき魔所の天狗の栖往古より杣入らず」とあったが、森は文明に侵されていない自然といえる。そして木を切るのは文明の営みということになる。『出世景清』『職人鑑』にみられた職人への賛歌、文明への賛歌も想起したいところである。

木を切ること、親子を無理やり別れさせること、人を売り買いすること、本作品には三つの反＝自然が存在する。純粋自然の木を切り倒し、建物に利用するという挿話が冒頭にあり、そのため老臣は切腹し、母親は息子を奪われる。老臣の息子は人買いとなって、主人の息子を売るはめとなる。親子の別れとは、すなわち吉田家の班女と梅若・松若との別れであり、また老臣淡路前司と七郎惣太との別れである。しかし、親子の別れはいつか訪れるものであって、むしろ自然に属している。だが、母が子を必死に探し求める「狂女道行」はその過剰性ゆえに反＝自然にみえる。「万人に枕を並べ身の汚たる女」と罵られたとき、班女は狂乱に至るのである。裁判が保証する父系的相続は否認されている。

「人商人」となった忽太が反＝自然の存在であることはいうまでもない。

商ひ知らず耕作知らず、人商人の証文頼まれ書初めしを、悪道の師匠とは、今日の只今思ひ知る…　（第三）

書くことが自然に反する営みに繋がっていったのだが、老臣の息子である惣太は、主家再興に必要な金策のため人買いを行っている。

機織り糸繰り濯ぎ洗濯飯炊く業も知らぬ女、夫は弓馬の道ならで売買算勘秤目も、暗き渡世の糸切れて、命を繋ぐ手立てなく、浅ましや人売りに成下がり、幾千万かの人の子に辛い目見せし罪咎と、子を失ひし親々の、嘆き

が積もりに積もつて身一つに重き天の責め、去年三月十五日、遂に自害し世を去つたる塚は印の松一本…（第四）

惣太と唐糸は自然に繋がる仕事をもてない夫婦なのである（ここで、カップルの主題の重要性が浮上する）。惣太は自害してしまうが、反＝自然の営みは自害に至るほかないといえる。舟長となって舟を操る唐糸は、かろうじて自然に繋がる仕事を見出したようにみえる。班女を舟に乗せ案内しているのは唐糸である。

だが、惣太が自害したのも、自ら天狗になって松若を救うためであった。天狗たちは燃え上がるが、火は自然の要素であると同時に、人間が操る反＝自然の要素にほかならない。

時に有りつる天狗の姿一団の野火と燃へ上がり、「我行く方を導べにせよ若君出世の道引」と、空に声あり頼み有跡を慕ひて人々は、又都路に、立帰るもとより魔仏一如にて、自性清浄天然と心動かぬ武士は、忠に止まり義に止まる親に先達葉末の露、夫に離れし床の海、思ひは千々に変はれ共止まる、所南無阿弥陀、南無阿弥陀仏の声計、跡に残して今迄も硯の水のすみだ川涙に、染めぬ袖ぞなき　（第四）

第五段の結末は行房を殺した百連を討ち取る花火の場面だが、火と水の和解として読み解くことができる。「波も色なる迎ひ提灯ちやうさやうさ渡り拍子の、鉦太鼓、天満宮の神事迄、火をもて作る水の面手、を尽くしたる舞扇…」。いわば、自然の水と反＝自然の火が調和しているのである。

ところで、善と悪、敵と味方の区別はそれほど容易なのであろうか。善と悪、敵と味方は区別しがたく、入り乱れるのが近松の演劇といえる（「双面」や「影の煩ひ」のように）。次の場面を振り返ってみよう。

「八丈が島へ参らふと吐かす迄叩く」と、堅木の寄棒追取延べ棒もしはしは撓る計、声をかけて続け打棒は強く身は弱く、肋の急所にはつたと請、「うん」と計に手足を縮め色も変はつて息絶へたり。　（第三）

かつて惣太が梅若を折檻していたのは、梅若を再生させるためだったのではないだろうか。都に拘泥する弱々しい存在を八丈島まで流浪する強い存在に変容させる必要があったからである。惣太が自害したのは自ら天狗になって松若を救うためだったが、ともに親を失った存在として惣太と梅若・松若には分身関係がある。善と悪、敵と味方と思われていたものに分身関係を設定するだけで、その戯れによって歴史は全く異なった様相をみせるのである。

第二段冒頭に「鳥に似たる蝙蝠あり魚に似たる蝌有」とあるが、実は言葉の戯れのなかでその区別さえ判然としな

くなる。

「汝も知る通行房と某、替はり替はりに天子より預る武帝の筆の鯉の掛物、行房に渡す日限も近々、是を押さへて意地張らんと思ふを頼に胸をさすつて立帰る、只今は何国よりの帰りぞ」と、昼の炎を其ままに燻ぼり返つて尋ける。（第二）

行房と百連が「替はり替はり」に鯉の掛け物を預かっているという設定には分身関係が仕組まれている（この百連と景逸の馬上の会話にも分身関係が見て取れる）。しかも、ここでは反＝自然の火が燃え始めている。鯉の掛け物に目を書き入れたために、絵から鯉が抜け出してしまうのだが（「掛絵の鯉の抜出で行方知れず」）、近松の時代物とは絵の中に収まっていた歴史が漂い出すものではないか。このせいで梅若もまた流離を余儀なくされる。目を書き入れることは人為であり、反＝自然の営みにほかならない。だが、その結果は人為を超えてしまう。分身関係の設定もまた人為であり、同時に人為を超えた効果を生み出すのである。

二　『津国女夫池』を読む――カップルと歴史

『津国女夫池』において重要なのは、まさに「女夫」という点にあるように思われる。なぜなら、夫婦の悲劇がなければ本作品は深みを持ちえないからである。冒頭に登場するのは一身両頭の亀である。

「両頭の出たるは異国本朝其例なし。菅家清家安倍卜部の勘文、善悪の理分明ならず、武家の評義たるべしとの勅諚、亀を一覧し吉凶つつまず勅答あれ」と述給へば、藤孝立寄檻を開けば実誠、一体に二ッの頭飼を諍ひ喰あふ有様…（第一）

一身両頭で争う亀が足利将軍兄弟を表していることは明らかだが、後に登場する近親相姦を疑われる夫婦や不正義を犯してしまった夫婦と考えることもできる。三好長慶の息子は「米は人の性命を養ふ宝なれ共、藁は履わらんぢと成て跑らる。米と藁とは同根なれ共、米の真似のならぬが天地の定り」と発言して義輝と義昭を区別しようとするが、ともに泥中の同根であることはいうまでもない。

泥中の亀とは大地の豊かさであり、大地の生産力であろう。問題は、それがどのように分配されるかである。近親相姦とは分配と交換の拒否といえる。将軍の御台所を探し出した冷泉造酒之進、清滝夫婦は自分たちの関係を近親相姦かと思い込むが、そうではなかった。しかし、父の冷泉文次兵衛は同僚を殺害し、その妻を娶ったことが判明する。近親相姦は回避されており、分配と交換はすでに始まっていたのである。だが、分配と交換には不正義が付きまとう。したがって実は、近親相姦回避の挿話と不正義の結婚挿話は表裏一体といえる（夫婦関係を無効にする内的な危機が近親相姦だとすれば、夫婦関係を脅かす外的な危機が第三者の存在である）。近親相姦にみえた猫の戯れは見せかけにすぎない。

罪を告白すると、文次兵衛夫婦は池に身を投げる。「男を害し其妻を娶る畜生残害の此体、焼くな埋むな鼈の、餌食なれと並びの池へどうと飛込」。夫婦は破滅するが、焼かれることなくまた大地を豊かにするのであって、ここには循環がある。

第三段に女夫池の挿話があり、第四段に「千畳敷其世がたり」がある。本作品は再演時に『室町千畳敷』と外題を替えたというが、千畳敷の華やかさは実は池の深さによって支えられている。女夫池の挿話がなければ足利将軍の花御所は空虚なものにすぎない。文次兵衛夫婦の悲劇は足利将軍家の内紛にかかわっていないという見方があるが（新古典大系脚注）、一身両頭の亀を介して重なり合っている。情動的な深さを獲得するとでもいおうか、カップルを設定するだけで歴史は全く異なった様相をみせるのである。

傾城の大淀を迎え入れた室町御所は遊郭のような空間であり、大きく淀んでいる。「室町殿の御所が揚屋に成、傾城を請込むと今聞た、扨々仰山な揚屋入…」（第一）。花の御所は擬似的な大地の豊穣世界といえる。したがって、将軍義輝が女色に耽るのも必然であろう。義昭は出家し、御台所は逃れる。三好長慶の養女となる大淀は、側室を手討ちにして楽しむ残酷な鬼女である。

「いざ検分」と両人死骸に立かかり、はね除くる薦の下下様ならぬ女の風情、面の皮剥むくればたとへ存の者成共、面色爛れてそれぞとは、誰が目にしろき…　（第二）

顔の皮を剥がれ匿名の存在と化した女は、死骸となって大地を豊かにしているのである（死体がどちらの領地にあ

るかなどという人為的な境界は関係ない)。したがって、そこには蛇が住む。側室たちは「人食ひの鬼女よ蛇よ」と大淀を罵倒している。義輝が三好長慶に殺され室町御所が炎上すると、義昭はその夢を見る。その意味で、義昭は知覚の人である。

義輝御声苦しげに、いかに大淀、汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる、苦患いつかは逃れんと、叫び給へば鬼女は笞を振上げ振上げ、煩悩業火の娑婆の妄執思ひ知らずや腹立やと声々、天地に轟けり。（第四）

義昭が夢に見た花御所は人食い鬼女が笞を振るうカニバリズムの世界である。したがって、大淀の湿潤の世界を整序するためには火が必要とされるのである。結末では義昭が三好長慶を討つことになる。「一本づつ片端に引抜いて詮議せうかいやいや抜くも手間遠也、火を付て焼立ふ、尤々それよそれよ、一同に、火よ、燃草よ、とひしめけば、入道梢に居るも居られず、枝より枝に伝ふ拍子、松の小枝に指添の、鍔引かけて身は鞘放れ、大地へどうと落てけり」。火の効果、それを確かめるために、さらに近松作品を読み続けていかなければならない。

三　『信州川中島合戦』『関八州繋馬』を読む――構造と歴史

『信州川中島合戦』において重要なのは、まさに「川中島」という点にあるように思われる。情動の空間としての隅田川、女夫池、それらが川中島に流れ込んでいくからである。単純化していえば、近松の作品はすべて川中島を舞台にしている。近松の心中物とはいわば心中川中島なのである。

本作品で最もよく知られた場面は山本勘介の老母が自ら死を選ぶ三段目だが、それは曹操を罵った徐庶の母の挿話に倣っている。信玄と謙信は劉備と曹操に当たり、山本勘介は諸葛孔明に当たる。『三国志演義』との構造的な類似によって、近松の想像力は刺激されたのであろう。しかし、近松作品の表現は『三国志演義』の構造からはずれたところで成立している。ここでは、そうした表現の起爆力のようなものを探ってみたい。

本作品は「森々たる人品千丈の松のごとし、磥々として節多と砢々して目たかしといへ共、大廈に施す時ば棟梁の功用大哉」と始まるが、いわば山本勘介は切られるべき天然の人材なのである。山中の勘介はすでに信玄と謙信確執

の予兆を読み取っていた。

「両方の頂上より二筋出る、白雲の、中に当つて乱れ散りさながら軍の、場のごとし、察する所甲斐越後両家の確執疑ひなし、信玄は良将輝虎は勇将、あらおもしろの雲の戦ひ、いづれが勝共負る共、主持ぬ身の気散じ」と、眺むる空も秋の日の短き煙管取出し、打石の火に立煙、浅間を羅宇に比べつつ煙草に余念なかりけり。（第一）

本作品において合戦は火のイメージを帯びている。噴火する浅間山は重要であり、信濃の村上義清が両家不和のきっかけを作る。次の場面に注目したい。

山合にちらちらと炎に移る旗の手の、色も定かに分らねば、伸び上り飛上り、気も逆立ちし心の闇の黒髪山、夫が上れば続いて上り、炎は下に見おろせ共一天暗き真の闇…（第二）

武田家と上杉家の確執を引き起こしつつ、勝頼と衛門姫は恋仲になっていく。

「狩人を恐れ屈み臥と覚えたり、我も暫く隠れ家」と並びふす猪の萩の床、草引覆ひ忍ばるる憂目ぞ恋の習ひ成。（第一）

武田勝頼と衛門姫を情動的に結びつけるのは、この猪ではないだろうか。「小山のごとく背を持上によつと出たる手負ひ猪」が緊迫感を盛り上げる。そして、勘介を片目片足の身体を変形させたのも猪である（「我も猪の難より五体不具…」第二）。つまり、猪は恋の情動と身体の情動をともに形成する要因なのである。

勘介の身体は女房の言葉と共鳴することで、いっそう情動を高めている。琴の弾奏のように勘介とお勝は音楽的に響き合うのである。「枯てかひなき柞原、陰を離れて別れ路は跡、に引かるる足弱車、片端車や廻らぬ舌のドドドド吃りが尽きせぬ名残り、筆に書かれず歌はれず泣つ、叫んづ足もどもる身もどもる、歩み、かぬれば力を付、引つ立引かれてココココココツ心を残してカカカカカカカン、帰りけり」（第三）。

テーブルマナーに背いた懲罰ともいえるが（「膳に向へば礼儀あり、法に背慮外婆…」）、勘介の老母は死ぬ。その諫死によって、謙信は名を改め生まれ変わる。「家の弓矢は捨ず共姿は発心、名をも今日より改め輝虎入道謙信、切たる髪は仏にも捧げず、出家の手にも渡すまじ、勘介に取らする謙信が首取たる心…」（第三）。近松において残酷な母は存在を変容させるのである。

「秋の山、紅葉の床に、牡鹿の寝たよ、しほらしや、立ぬきに露霜おりし、錦は山の、紅葉葉、紅葉葉の流るる川を渡らば、錦中絶へんエイソリヤ、小鹿の、渡らば中絶ん…」と始まる第四段の紅葉は火のイメージであり、合戦の表象が置き換えられたものではないだろうか。勝頼が村上義清を討ち取るところでは「両方手は負ふ惣身は血潮紅し深き秋の葉の、紅葉を散らして、切結ぶ」と語られるからである。

本段には鹿が出てくるが、本当に大事だったのは猪のはずであろう。つまり、本段では合戦と猪の野生が、紅葉と鹿の文化的なイメージに置き換えられているのである。猪が消えたように、勘介は信玄の身代わりになって消える。こうして川中島の合戦は二度と行われることなく、和平へと至る。

次に『関八州繋馬』を取り上げてみたい。なぜなら、「関八州」こそ拡大された川中島だからである。前作では老婆が諫死していたが、本作では源頼平の乳兄弟纜が諫死する。本作でも重要なのは構造的な類似である。すなわち、楚の荘王が冠の纓をすべて断ち切らせて家来の失態を救い、後に家来がその恩義に報いたという「絶纓」の故事を踏まえている。頼平に失態を救われた纜は、その恩義に報いて諫死するのである。

平将門の遺児良門、小蝶はいわば双子である。謀反を狙い源氏に奉公するようになった小蝶は源頼信に恋をし、その恋敵詠歌姫を頼信の弟頼平に結びつける（瓢箪が宙吊りのイメージを演出する）。頼平は詠歌姫と駆け落ちし、平良門と盟約を結ぶことになる（契約を根拠づけるのは「平」の共通点であり、頼平は平氏に頼る）。頼平の乳母に当たる渡辺綱の伯母とその息子纜は翻意するよう頼平を必死に説得する。かつて小蝶のせいで失態を演じそうになり頼平に救われた纜は、頼平のため自ら死を選ぶ（二人は紐を切ることで繋がっている）。それが三段目の見せ場である。頼信への恋に破れた小蝶は怨念から土蜘蛛となる。その妄執を晴らすため京都東山の大文字焼きを模した送り火が行われる。

聖霊の送り火に付いてお帰りや、お帰りやお帰りやお帰りや、秋ならぬ秋こそ来たれ、たそかれ時の淋しげに、
築山の陰、ほのめくは、群がる蛍か明星か、影は三つ四つ松明の、数も四人の女房負けじ劣らぬ、山の腰、東西
上下一時に、一画一点麓より、追上りては又峰より、伝ひ集まりあなたの谷、こなたの尾先一つに寄れば、大文

字赫奕たり。　（第四）

送り火の趣向は大評判だったらしいが、この直後に起こった大坂大火と重なり不吉と噂されたという（『浄瑠璃譜』）。虚構が現実の大火を招き寄せてしまう、これが作品の恐ろしさであろう。そのためか本作品は以後、上演されなくなる。歴史が封印機能を働かせたのである。

公時きつと見、「形に似せて臍をまくと扨もでつかい子袋、大仏殿の灸の蓋」と蹴散せばさつと裂け、其色青蒼たる小蜘共、幾千万の数を突くし這ひ出る、簇々と群がり集ては区々単々と別れ散り、這うかと見ればすつくと立、蜘かと見れば小鬼の形真中におつ取籠め、小手に飛付キ足にまとひ取捨て払へど群がり寄る、踏み退け蹴飛ばし薙立れば、山陰暗き梢を伝ひ、己が身を焼く蜘火の光りここに点しつかしこに消ゑ、殷の妲己が火を愛し、火山を尽すに異ならず。　（第五）

『津国女夫池』の結末には火が放たれていた。その直後の『女殺油地獄』ではまさに油が火の危険なイメージを湛えていた。『心中宵庚申』でも灯りは燃えていたはずである（「果は夫婦が無常の煙…」）。しかし、『川中島』は発火点寸前までいきながら燃え上がらない。それが『関八州繋馬』では発火に至り、大坂の大火を呼び寄せてしまうのである。送り火を描いた『関八州繋馬』は上演されることなく封印され、いわば歴史の地雷となる。火花が飛び散るように蜘蛛の子を散らすように動く言葉こそ近松作品の地雷であり、埋み火として残る。

本作の「繋馬」とは糸を撒き散らす土蜘蛛のことであろう。綱に繋がれた馬の受動的なイメージは、糸を撒き散らす蜘蛛の能動的なイメージに反転しているからである。『双生隅田川』の鯉、『津国女夫池』の亀、『信州川中島合戦』の猪、『関八州繋馬』の土蜘蛛をみてくると、動物たちが歴史を動かしているのがわかる。型にはまった歴史を生成へと送り返すのが動物の役割であり、近松は動物を導入することで歴史に生成変化を呼び込むのである（地雷としての土蜘蛛）。

構造を反復させるだけで、そのずれによって歴史は全く異なった様相を呈する。「ここに点しつかしこに消ゑ…」とあったように、歴史が出現したり消滅したりするといってもよい。そのとき構造的な類似が重要な役割を果たしている。

最後にまとめておこう。機能的な分身の設定は単に奇抜な御都合主義ではない。それは何かを探るために必要なのであって、いわば知覚の方法である。カップルの設定は人格的な愛情の問題ではない。それは非人格的な情動を取り出すために必要なのであって、いわば情動の方法である。構造の類似は単なる知識の問題ではない。それは行為の効果を決定するために必要なのであって、いわば行為の方法である。

人買い惣太に関していえば、最初に知覚の人であり、次に情動の人であり、最後に行為の人となる。いずれにしても、近松劇の分析において知覚、情動、行為は有効な概念であるように思われる。知覚の人であった義昭は、情動の人の介入によって行為の人となる。知将信玄が知覚の人であり勇将謙信が行為の人であったとすれば、謙信は情動の人の介入によって知覚の人となる。小蝶のせいで行為の人になった頼平は、纜の介入によって再び知覚の人に戻る。梅若・松若兄弟の挿話は惣太、唐糸夫婦の挿話に繋がっていくし、足利将軍兄弟の挿話は文次兵衛夫婦の挿話に繋がっていく。勘介夫婦の挿話は諫死の挿話に繋がっていくし、頼平、詠歌姫の挿話から諫死の挿話に繋がっていく。構造的な行為の類似は「双生」の主題にほかならず、分身の設定ともいえる。こうして分身、カップル、構造は互いに関連してくる。

つまり、分身による知覚の広がりはカップルによる情動の深みへと移行し、カップルによる情動の深みは構造による行為の決定へと移行する。そして、構造による行為の決定は分身による知覚の広がりと共鳴する。分身、カップル、構造を設定する近松は、それによって知覚、情動、行為を描いているのである。

おわりに——近松と馬琴

いま改めて近松と馬琴を読み返してみると、馬琴が近松から多くを学んでいることがわかる。馬琴の『椿説弓張月』には山奥の隠れ家を訪れると主人が湯治のため留守であったという設定がみられるが、それは『信州川中島合戦』第二段の信玄が勘介を訪れる場面を模倣しているのであろう。阿公が胎児を取り出す『弓張月』の名高い場面が、敵弾に倒れた后の胎内から王子を取り出す『国性爺合戦』の場面を踏まえていることは明らかである。孤島への追放とい

う点では近松の『百合若大臣野守鏡』が『弓張月』に影響を与えているにちがいない。

もちろん、馬琴の『墨田川梅柳新書』は近松の『双生隅田川』を踏まえている（後者には「梅若負へば背中も香に匂ふ」と背負う場面があった）。『墨田川梅柳新書』の梅稚、松稚は実の兄弟だが、馬琴の一番の手柄は、むしろ亀鞠という女芸能者の設定であろう。

馬琴の『三七全伝南柯夢』冒頭には木を切る挿話があるが、おそらく近松『双生隅田川』を踏まえている。『三七全伝南柯夢』における馬琴の手柄は、そこに三勝という女芸能者の活躍を繋げた点である。馬琴は読本を活気づけるために芸能者の導入を意欲的に試みているのである。それを「接木」の方法と呼ぶことができるだろう。「接木」はいくらでも可能なのであって、『三七全伝南柯夢』で死んだはずの主人公を生かして、その続編『夢合占南柯後記』まで作っている。

芸といふものは、実と虚との皮膜の間にあるものなり。（中略）虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みがあつたものなり。

（『難波土産』）

読まれる通り、近松にみられるのは虚と実の二元論であろう。その中間で宙吊りによって情動が発生するのである（これは聞き書きであって、近松の言葉は虚か実か宙に吊られている）。それに対して、馬琴にあるのは多元論にほかならない。名高い「稗史七則」などみれば明らかであり、『八犬伝』にみられる数への拘りは尋常ではない。馬琴の数字は近松の三段物、五段物を超えるのである。

『三七全伝南柯夢』冒頭には盲人が登場する。前稿「近松と西鶴」（本誌一号、一九九七年）でも論じたが、『出世景清』などを見れば明らかなように、近松において盲目は女性的なユートピア出現の条件といえる。馬琴における盲目は男性にとっての恐怖であり、その試練を受け入れることでのみ創造が可能となる条件である。

近松の時代物が歴史上の名高い人物を演劇化するのに対して、馬琴の読本は歴史に埋もれた人物を小説化している。これは一時に大きな観客を要する演劇と埋もれても読み継がれる小説というジャンルの相違に由来するものかもしれない。近松が名前の強度を高めるとすれば、馬琴は名前を発掘してくるのである。

注

〔1〕先行研究として木谷蓬吟『大近松全集』（一九二二年）の解説、諏訪春雄『近世芸能史論』（笠間書院、一九八五年）、「双子隅田川」の成立と人買物としての意義」「「津国女夫池」における悪の悲劇」「『関八州繋馬』と享保の改革」を収めた白方勝『近松浄瑠璃の研究』（風間書房、一九九三年）、守随憲治「『関八州繋馬』観」（『文学』一九五二年一〇月号）、内山美樹子「近松の悲劇性」（『日本文学』一九六六年二月号）、同「『関八州繋馬』とその周辺」（『歌舞伎批評と研究』八、一九九二年）、松崎仁「『関八州繋馬』論」（同一九、一九九七年）、松田修「関八州繋馬」（『近世の文学』上、有斐閣、一九七六年）などを挙げておく。西鶴の『本朝桜陰比事』巻一に「双子は他人のはじまり」とあるが、これが小説的リアリズムであろう。それに対して、演劇的アイデアリズムにおいては双子が想像力を掻き立てるのである。

〈キーワード〉双子、夫婦、川中島、土蜘蛛、近松、馬琴

〈要旨〉本稿は享保九年一一月に亡くなった近松門左衛門、晩年の時代物『双生隅田川』（享保五年八月）、『津国女夫池』（享保六年二月）、『信州川中島合戦』（享保六年八月）、『関八州繋馬』（享保九年一月）を対象として、分身、カップル、構造という視点から分析を試みたものである。分身による知覚の広がりはカップルによる情動の深みへと移行し、カップルによる情動の深みは構造による行為の決定へと移行する。そして、構造による行為の決定は分身による知覚の広がりと共鳴する。分身、カップル、構造を設定する近松は、それによって知覚、情動、行為を描いているというのが本稿の結論である。また、歴史を生成へと送り返す動物の役割についても論じている。

〈付〉近松主要作品案内

本稿「近松の時代物」および前稿「近松と西鶴」（本誌一号、一九九七年）を補足するために主要作品案内を掲げておく。なお上演年月は『近松全集』（岩波書店）に従っており、時代物と世話物に分け、収録順に取り上げる。

〈近松の時代物〉全集一

『世継曾我』（天和三年九月）は曾我兄弟による仇討ちの後日譚である。仇討ちを成し遂げた後、十郎は討たれ五郎は捕らえられた。頼朝は諸国の武士の射止めた鳥獣を報告させるが（「狩場の高名」）、捕まった五郎も鳥獣のごとく扱われる。その恋人、化粧坂の少将は大磯の虎とともに嘆く（「けはひざか」）。二人は曾我の里に急ぎ（「虎少将道行」）、兄弟の母親に仇討ちの様子を語って聞かせる（「虎少将十番斬」）。十郎の忘れ形見に曾我の本領が与えられ、遊女たちが舞を舞う（「風流の舞」）。

『出世景清』（貞享二年）は悪七兵衛景清による頼朝暗殺の失敗を描く。頼朝を付け狙う景清は熱田大宮司方に身を隠し、その娘小野姫と結婚する。遊女の阿古屋は嫉妬のあまり、景清を密告してしまう。景清に許しを乞うが許されず、阿古屋は壮絶な死を選ぶ。頼朝暗殺に失敗した景清は自ら目を抉って、日向に下る。それは自己懲罰であり、阿古屋との和解を意味している。

『三世相』（貞享三年五月）は実在の遊女夕霧の追善作品で、その忘れ形見春姫を描く。「あの子が夕霧さまにたるとや、めもとなら口もとなら…」とあるが、近松においては父親との類似よりも、母親との類似が重要だといえる。左京北の方は継子である春姫を殺すように仕向ける。春姫は母ゆかりの大坂新町を訪れ、母の墓を詣でるが、そのたびに夕霧の霊が現れる。そして奈良に向かう（「春姫道行」）。左京北の方は不義密通を疑われ、自害する。結末では亡くなった夕霧と北の方が実は観音菩薩、勢至菩薩であったことがわかる。ここには夕霧、北の方、春姫の三つの世相がみえるが、恋慕に沈む衆生を救うのが近松の宗教であろう。

『佐々木先陣』（貞享三年七月）は藤戸で先陣を果たした佐々木三郎盛綱を描く。盛綱は先陣を果たすため秘密を聞き出した男を殺してしまうのだが、その妻と娘たちを助ける話である。男の妻は姫と同じ干支であるため身代わりとして殺されそうになる。「転ずる法の候其次第は、外に又同生れの女の尋求、三七日変体の文を授て…」とあるが（第三段）、身代わりを差し出せば存在が変容するというのが近松の法なのである。娘たちは京に向かい（「待宵時雨道行」）、若衆姿に身をやつして盛綱を狙うことになる（「あしかり」）。

『薩摩守忠度』（貞享三年一〇月）は勅撰集への入集を俊成に懇願し、六弥太に討たれる忠度を描く。和歌の入集は女性的共同体へのパスポートだといえる。そのため忠度は六弥太に討たれる契約さえ結ぶ。二人の海女が幼い天皇に名

所を語っているが（「一の谷名所づくし」）、忠度の身代わりになろうとするのは、この海女たちである。忠度を討ち取ったことを証明するため、六弥太は菊の前を鎌倉に連れて行く（「菊のまへ道行」）。菊の前は稚児に仮装したのに出産までしている。頼朝は源氏の名剣を賞美するが（「銘づくし」）、大事なのは忠度の和歌のほうである。

『主馬判官盛久』（貞享三年一〇月～四年一月）は平家の侍大将盛久を描く。主人公が海女に助けられる点が興味深いが、その妻は男装して身代わりとなって海女に殺される。亡き敦盛夫人と亡き忠度夫人は熊野比丘尼と偽って関所を通過しようとする。そのため地獄の絵解きをしているが（「びくに地ごくのゑとき」）、この絵も和歌と同じように情動的な媒体といえる。

『今川了俊』（貞享四年一月）は今川了俊の後継問題を描く。嫡子仲秋に対して叔父の貞広が謀反を企てるが、了俊によって取り立てられた青砥藤綱の息子藤次が助ける話である。雨宿りの辻堂で青砥、荒川、大道寺のトリオが邂逅する場面など馬琴に影響を与えているにちがいない。

『津戸三郎』（元禄二年五月）は義経に従って戦死した佐藤次信を弔う話である。次信妻の兄が題名になっているところに女縁の強さがうかがえる。草鞋売りの姉弟の視点から合戦に赴く人々について語られるのが「やくしよづくし」だが、近松の視点がどこにあるかよくわかる。懐妊していたはよ姫は生まれた子供を連れ、兄とともに次信のもとに向かう。それが「はよ姫道行」であり、次に「次信めいど物語」が続く。つまり、この物語を導いているのは女性なのである。熊谷入道と口論した三郎の胎内からは悪の玉が出てくるが、胎内からの産出もまた女性が教えてくれたことであろう。

全集二

『烏帽子折』（元禄三年一月）は義経の元服を描く。牛若を連れて雪道を落ちていくのが「常磐御前道行」だが、一貫して女性が導いている。しののめ姫は義経の元服を寿ぐ（「ゑぼし折名づくし」）。義経が詣でる伊勢神宮は女性的な場である（「牛若宮めぐり」）。

『大覚大僧正御伝記』（別題『女人即身成仏記』、元禄四年）の主人公は大覚僧正というよりも雨夜の前である。北野

まで行くのが「雨夜の前道行」であり、龍女の化身であった雨夜の前は変成男子となって成仏する。つまり、女性の変容こそ本作品の主題なのである。

『天智天皇』（元禄五年三月以前）は女性天皇斉明の後継問題を描く。その際に重視されるのは東宮の后選びである（「美人揃」）。東宮と后候補の花照姫は草木の苗を植え、豊穣を予祝する（「四季花うり」）。花照姫は住吉まで歩むが（「花照姫道行」）、住吉神が和歌の神であることが注目される。東宮は「秋の田の…」と詠んだ和歌の力で天皇となるからである。猿沢の池に入水するけれども蘇生する花照姫と采女、首を切られるけれども復活する絵師金岡、流されるけれども戻ってくる母天皇など蘇りは重要な主題である。そのせいか、本作品もリバイバル上演される。

『豊田秋の田』（正徳五年九月）は『天智天皇』を増補したものである。

『せみ丸』（元禄六年以前）は蝉丸伝説を踏まえている。女の恨みを受けて盲目になり、女のおかげで開眼する蝉丸という設定には女の力の大きさがうかがえる（「あまたの女を迷はせし因果の霞…」）。「せみ丸道行」は女のユートピア実現に至る過程なのである。「懐胎十月由来」がそれに対応しているが、女たちの単性生殖のようにみえる。「女蝉丸」（西沢一風、田中千柳）という翻案物が作られるのも当然であろう。「姫君俄に白髪の姥となり給ふ、今の間に年の寄るは合点参らず」、この生成変化こそ女の力である。

『大磯虎稚物語』（元禄七年七月以前）は近親相姦回避の物語といえる。義経の首実検があり（「首実検」）、鎌倉から島田に至る静の道行がある（「静道行」）。静が立ち寄ったところに虎の両親がいる。こうして義経物と曾我物が結びつくのだが、傾城となった虎は実の兄を客として迎え、近親相姦の危機が訪れる。しかし、虎には十郎という契約者がいる。近親相姦の危機を回避することで仇討ちは可能となるのである。杯を飲み干す間だけ母は五郎の勘当を許すというので、それをできるだけ引き延ばそうとする緊張した場面が出てくるが、勇壮な「みかり馬そろへ」もそうしたサスペンスを孕んでいる。

『吉野忠信』（元禄一〇年七月以前）は義経を排除するような義経物である。三井寺近くでの三人の行き違いが面白い。忠信は義経のためわざと傾城若紫と親しくしていたが、妻の花紫が嫉妬するので、わざと若紫の悪口をいう。それを若紫が立ち聞きする場面である。誤解が解けた若紫と花紫は大和へ向かい（「若紫花紫道行」）、義経と別れた静に出会

う。こうして女たちのトリオが結成されるのである（「女郎名よせ」）。藤葛で向こう岸に渡った義経の身代わりとなって活躍するのは忠信であり、義経は退場してしまう。

『十二段』（元禄一一年一月以前）は義経が男女両性から恋慕される義経物である。鞍馬山で多聞天から教えを受け、横笛を吹いた義経は、恋する僧正から巻物をもらっている。矢矧の宿では音楽の演奏に加わって横笛を吹き、浄瑠璃御前と結ばれる。母親は喜び、四季の島台を飾る（「長生殿四き」）。結婚できなくなった藤太は浄瑠璃御前を追放し（「上るり御前道行」）、峰の薬師の笹谷で殺す。殺された浄瑠璃御前は薬師如来として蘇る。

『曾我七以呂波』（元禄一一年一月以前）は文字の効用を説く曾我物である。かぶろ竹之丞は虎御前と改名する。しかし曾我兄弟を贔屓にしていたので、端女郎に落とされ、旅籠屋の出女に売られる。虎と少将は灯篭をもって箱根に向かう（「水向参道行」）。転落する虎の挿話と対照的なのが、箱根寺で権勢を誇る犬坊丸の挿話である。五郎は七つ以呂波の意義を説いて、多くの兄弟子より上座に着く工藤祐経の息子を懲らしめる。

全集三

『本朝用文章』（上演年月未詳）は日野資朝が佐渡に流され、息子の阿新丸が仇討ちをする話である。阿新丸と菊野姫は石灯籠に縛り付けられ、目の前で資朝は殺されるが、そこで最も情動が高まり、脱出へと至る（「ゆん手のかたの高手のなは、ともし火にさしあつればふつときれてのきにけり」）。殺されるとき資朝は「何まなこが見へずをくれたりと申か…まなこくらき生盲目とはおのれが事よ」と相手を罵っているが、盲目性に近松劇の最も敏感な一点がある。

『最明寺殿百人上郎』（元禄一二年三月頃）は地方巡検に出た最明寺殿、北条時頼と息子の時宗を描く。義経の再誕とされる時宗は天女丸という女性的な名前をもち、海女に助けられている。「かまくらの御だい所せんひ松したぜんにのふうをしたひ…」と語られる女性たちの軍団が印象的である（「女せいぞろへ」）。

『日本西王母』（元禄末年頃）は興福寺南大門における奇跡を描く。天皇に西王母の桃を献上した桃園染五郎豊舟は二位の君と契りを交わすが、その姉で醜貌巨体の薄雲と結婚するよう命じられる。二位の君は村正兄弟に結婚を迫られ、子供を失って悲しむ（「二位の君道行」）。二位の君を助けた老人は息絶えるが、二位の君の与えた桃の力で蘇る。

薄雲は残酷な女であり、遊女の耳鼻を削ぎ二位の君を殺す。しかし、「反魂香」で苦しみを訴えていた二位の君も観音から与えられた桃の力で蘇る。したがって、桃とは死者を甦らせる女性的な物体なのである。川に投げ込まれた二位の君の息子は淀鯉の口から現れるが、それも桃の一形態であろう。

『曾我五人兄弟』（元禄一二年）は姉夫婦、ならびに弟の禅師坊を含めた五人兄弟が登場する曾我物である。虎の古下駄で笛が作られるが、女性の履き物で作った笛はいかにもフェティッシュな物体であろう。だから、鹿が寄ってくるのである。興味深いのは曾我兄弟の姉が登場し、その結婚披露のため十郎が遊女たちから衣装を借りてくるところである（「小袖もんづくし」）。祐経が仕掛けた絵よりも、不揃いの衣装のほうが情動化されている。五郎もまた女装して朝比奈三郎と力比べをするのである。

『団扇曾我』（元禄一三年）は契約を重視した曾我物である。十郎は恩ある仁田に討たれることを約束し、五郎は恩ある遊女亀菊に捕まることを約束する。すべては事前に契約が成立しているのである。だが、亀菊が捕まえた五郎は男装していた恋人の少将である。経巻までが「傾城請状」に読み替えられる世界では、すべてが女性化しているかのようだ。女たちは兄弟の悲劇を嘆き、兄弟の恋人たちが団扇売りになって事件を報告する（「虎少将道行」）。女たちは事件を煽り立てているのである。仁田に殺された猪は悪霊となるが成仏する。これが曽我兄弟の運命でもある。次の『百日曾我』（元禄一三年）では、頼朝が曾我兄弟の神霊を寿いでいる（「歌仙」）。

『天鼓』（元禄一四年）は楽人富士丸の娘おもだかに伝わる天鼓の物語であり、謡曲を題材にしている。天鼓を奪おうとする伯父時景は動物のコードに全く通じていない。それに対して、おもだかは動物と触れ合うコードをもつ。おもだかの恋人は中将だが、その下人巴丸は鳥追いに変装しているし、いっしょに狐釣りをする。中将を追い求めるところには「ねぐらさだめぬ山がらすをのがすがたの…」とある（「おもだか姫道行」）。おもだかの霊が現れ、面を脱ぎ捨てると狐になる。なお、馬琴の『三国一夜物語』も謡曲『天鼓』を題材としている。

全集四

『用明天王職人鑑』（宝永二年一一月）は仏教伝来をめぐる対立に道成寺伝説を取り込んでいる。外道を信じる山彦皇

子は、仏法を信じる花人親王を討つ。親王方の諸岩は佐渡に流され、漂着した親王と再会する。諸岩は皇子方の妻を離別し、佐用姫と縁を切ろうとする。佐用姫の兄を改心させるため母は自ら死を選ぶ。浜から鐘が引き上げられた播州では鐘供養が行われ、その場に遊女室君となった諸岩の妻が現れ、蛇体となる。山路と名前を変えた花人親王は豊後真野長者のもとで働いている（「さんろ玉世の姫道行」）。継母は長者の娘玉世姫を流産させようとするが、仏法の力で男子が誕生する。それが聖徳太子である。山彦皇子を倒した花人親王は後に用明天皇となる。「仏教礼賛劇を書きながら、近松はどこかで仏教によってつくられた文化の流れを冷たく見ていたのではないだろうか」と評されるが（渡辺保『近松物語』）、仏教に敵対した者たちさえ掬い上げるのが近松の仏教であろう。制度的仏教ではなく、いわば地蔵菩薩的仏教である。また、ここには職人たちの祝祭性が見て取れる（「職人づくし」）。

『本領曾我』（宝永三年四月以前）は謡曲『熊野』の内容を取り込んだ曾我物で、遊女の熊野が登場する。鶏合わせに勝った熊野は曾我兄弟の父親に渡されるが、狐がついて物狂いとなる。亡き義朝を祭るべき託宣があり、翌日から殺生禁制となる。熊野に舞を舞わせ（「新町大夫づくし」）、その間、宝剣友切丸を奪い取ろうとして緊張が高まる。曾我兄弟は捕縛されるが、鶏が鳴き殺生禁制の日となって助かる。遊女熊野とともに動物の力が導入されているのである。

『加増曾我』（宝永三年四月以前）は『本領曾我』の後日を描く。髪を結って五郎を元服させるのは熊野である。父の愛人は意図することなく息子を大人にしてしまったのである。草履取りとなった五郎は屈辱を受けても耐え続ける。五郎の出家を望み元服を望んでいなかった母親は五郎を勘当する。曾我兄弟が仇討ちを遂げた後、虎と少将は男装して兄弟の弟禅師坊のいる越後に向かう（「すあしの道行」）。頼朝は河津の本領を安堵し曾我の別所を加増した上で、禅師坊に義経と曾我兄弟を祭らせる。こうして義経物と曾我物は一つに結ばれる。

全集五

『村雨松風束帯鑑』（宝永四年暮以前）は在原行平とその恋人村雨、松風を描く。仁明天皇の若君が亡くなると、行平は浦島の子を身代わりに立て、松風を乳母とする（「今様うばぞろえ」）。竜宮の乙姫は松風に乗り移って、子供に乳を

与える。近松においては浦島伝説と行平伝説が海を介して繋がるのである。村雨松風は行平のため先を争って竜宮から宝剣を持ち帰り（「龍神風流」）、行平の妻は行平を探し求め（「つかさのまへ道行」）、行平の前で独楽を回す（「当世こまづくし」）。行平のまわりでは女たちが回っている。

『雪女五枚羽子板』（宝永五年一月）は足利義教が赤松氏の屋敷で観能中に暗殺された嘉吉の変を描くが、義教は無事である。「初春やくはらひ」のおかげであろう。羽子板は初春の祝いを示す。中庭に閉じ込められ雪の中で身体が凍りつく、これこそマゾヒズム的な光景にほかならない（「すあしの雪にとびおるればつるぎをふむがごとく也」）。男装した女性の活躍がすばらしく（渡辺前掲書が指摘する通り、シェイクスピアの『十二夜』を連想させる）、嘘八百の系図を語るのが「もんさくけいず」である。将軍は道行をするが（「源義教公道行」）、無事に帰還する。冒頭で楽器を折られたが、最後に楽器が奏でられるのである。

『けいせい反魂香』（宝永五年）は土佐光信の娘、傾城遠山と結ばれる狩野元信を描く。それに味方するのは吃りの浮世又平であり、敵対するのは長谷部雲谷である。したがって、「反魂香」と題された本作は絵師の物語になっている。又平の絵はその吃音によって情動化され、元信と遠山の道行は夢の中で情動化される（「三熊野かげろう姿」）。

『傾城吉岡染』（宝永七年三月以前）は剣法家吉岡憲法を描く。憲法は染織家としても成功しているが（「紙子ひひながた」）、足の悪い兄のために家を出る。裏切られた傾城吉岡が憲法を恨むのが「夢中のおぼろ染」である。憲法の弟子石川五右衛門は憲法の息子を助けるが、釜に隠れていたところを見つかって釜ゆでの刑となる。縁組みを取り仕切っていたのは母親であり、足の悪い兄に代わって道行をするのは縁組み相手の女性である（「道行法のあしだ」）。つまり、吉岡染めは何人もの女性たちの情動に染め上げられているのである。

全集六

『酒呑童子枕言葉』（宝永七年五月以前）は弘徽殿女御を亡くした花山天皇の嘆きから始まる。冒頭にある「千たび見れば千々の思ひきびし、一たび見るに一つの憐ひことふかし」という言葉が近松的な情動を伝えている。冒頭にあるそれこそが枕言葉なのかもしれない。酒呑童子が三の君を奪うと、頼光たちがそれを奪い返す話だが、弘徽殿にそっ

くりなのが三の君であり、三の君にそっくりなのが右近である。母親の乳房を忘れかねて「三千坊の乳房を夜な夜な吸うて」鬼になってしまった酒呑童子の設定には近松的な特質がうかがえる。類似のものを求め続ける点で、花山天皇と酒呑童子はよく似ている。

『孕常磐』(宝永七年閏八月頃)は牛若丸とその母常磐を描く。取り上げ婆に変装した弁慶によって常磐は出産するが、子供の首は父親に刎ねられる。男の権力のもとでは生きることができないのである。したがって、牛若丸も女の力に頼ることになる。それが浄瑠璃御前である。

『源氏れいぜいぶし』(宝永七年頃)は題箋に「孕常磐追加」とあり、その後日譚といえる。頼朝の愛人を毒殺し、妻を服毒自殺させてしまった医師の二人は、いわば女たちに説得されて頼朝を味方することを決めている。浄瑠璃御前に冷たくされた義経も、女に促されて闘う決意をしている。浄瑠璃御前の侍女が主人の病死を語って泣かせるのが「れいぜいぶし」である。つまり、『孕常磐』同様に本話でも一貫して女性たちが男を導くのである。その証拠に、本話では二人の男が「木のうろ」に入って助かっている。

『兼好法師物見車』(宝永七年以前)は兼好が出家し『つれづれ草』を書くに至った経緯を描く。独身者的というべき兼好のまわりに次々と女性が押し寄せてくる喜劇にもみえるが、兼好が近づいてくる女性を遠ざけるために別の女性を紹介すると、その女性が犠牲になってしまう。美しい妻をもった塩冶判官があっけなく殺されのに対して、犠牲となった女性が丁寧に供養されるというところに近松の女性的特質が見て取れる。本作品は『碁盤太平記』という続編さえ孕んでしまうのである。

『碁盤太平記』(宝永七年)は題目に「けんかう法師あとをひ」とあり、元禄一五年に起こった赤穂浪士の仇討ちを『太平記』に置き換えている。主人公は切腹した塩冶判官の旧臣大星由良之介だが、女性たちのほうが激しい。仇討ちを勧める母と妻は男を脅迫して自害するからである。間諜となっていた岡平は黒白の碁石によって師直館の見取り図を教えるのだが、その碁盤を情動化させるのは女たちだといってよい。大星の同志が猟船に乗って館に近づき炭小屋で師直を見つける場面には、野外の狩猟場のような雰囲気がある。

『吉野都女楠』(宝永七年)は『太平記』を題材としており、大森彦七と楠正成の合戦を描く。正成を討ち取った後、

美しい女性を背負おうとして、彦七が背中から締め付けられる場面がある（第一段）。いっぽう南朝の女たちは鎧甲を要求し、正成の妻は女楠となるのである。三種の神器を吉野に運ぶのも女たちである。楠を女性化させることで、近松は『太平記』から別の力を引き出そうとしているのであり、吉野は女たちのユートピアと化す。

『鎌田兵衛名所盃』（正徳元年一月以前）は父為義と息子義朝の対立を描く。本作で興味深いのは、父子で殺し合う合戦が批判されている点である。義朝は鎌田とともに逃げ落ちるが、鎌田は舅に殺されることになる。「名所屏風の四季」の背後で、その計画が進んでいく。鎌田の妻やどり木は父親を諌め、鎌田に忠告しようとする。だが、男たちは聞き入れない。それが男たちの限界なのである。

『源義経将棋経』（正徳元年一月以前）は平泉を脱出して蝦夷が島に辿り着いた義経を描く。女たちを駒にした将棋が行われているが、近松劇そのものを見ているかのようだ。最後に義経が辿り着くのは女護島である。死んだはずの浄瑠璃姫も信夫の前もそこにいるのであろうが、それが近松のユートピアにほかならない。「大日本の外迄も…」という点は馬琴の『弓張月』に繋がっている。

全集七

『曾我扇八景』（正徳元年一月以前）は遊郭の情景を取り入れた曾我物である。鬼王、団三郎が五郎の奪還よりも、母への報告を優先させるところが興味深い。「くるわの有さま女郎衆の身のうへを、筆にまかせ三部きやうになをし」たのが「けいせい三部経」である。近松の作品全体を「けいせい三部経」と呼ぶことができるかもしれない（歌舞伎、時代浄瑠璃、世話浄瑠璃の三部経）。「けいせいのつとめはたましひひとつのさばきにて、お侍と同じこと」という一節が『曾我虎が磨』（正徳元年一月以前）にあるが、魂の捌きにおいて侍に匹敵するのである。「おのこごに、をなごのかちはただふたつ、ややうむこととこひぐさのちからくらべの石の名や」と女の力が讃えられている（「とら少将道行」）。

『百合若大臣野守鏡』（宝永七年一月）は蒙古討伐に出かけ、孤島に置き去りにされた百合若大臣の話である。能『野守鏡』の鬼を思わせる残酷な女性が出現するが（「黄なる眼に尖れる爪、雉を追つかけ…」）、それは許嫁の立花であっ

た。炭火の上を歩かされる女性も同じ残酷さを体現している。盲目かどうかを試される場面だが、近松における虚実とは緊張をはらんだものなのである。

『大職冠』（正徳元年一〇月前後）は鎌足伝説を踏まえる。「唐韻通じ難し」などとあって朝鮮通信使の来日が当て込まれており、「我先生は天竺にて阿闍世王、唐土にては殷の紐王」という入鹿の台詞にも異国性が感じられる。満月は自ら犠牲となって玉を取り戻すかにみえるのだが、そうした海女の力は締め付ける藤蔓の力と繋がっている（「くるくるくると纏ひ絡んで…」）。

『けいせい懸物揃』（正徳二年三月）は将門物である。秀郷は七人の錦木の中から本物を見つけ手に入れる。同様に秀郷は、将門の分身の術が父親の遺体から集めた両眼、両耳、鼻、舌を利用したものだということを知る。遊女屋の長が持参した遊女の懸け物を絵解きするのが「けいせい懸物揃」である。将門の分身の術を破るのは遊女の力なのである。

『嫗山姥』（正徳七年七月）は坂田公時の異常な誕生と四天王の活躍を描く。親の仇討ちに間に合わなかった坂田時行が自害すると、その魂は妻であった遊女八重桐に乗り移り、怪童丸が生まれる。山姥の庵で怪童丸と出会った源頼光は、家来にして坂田公時と名乗らせる。二段目の廓話と四段目の山めぐりがよく知られているが、山姥の破壊的なまでの力がすばらしい。

全集八

『殛静胎内捃』（正徳三年）は『義経記』を題材としており、義経と静御前を描く。妓王妓女に平家の亡霊たちが乗り移っているが、無数の力の媒体になるのが女だといえる（それは人形の特質でもある）。身代わり地蔵の挿話があり、静御前の生んだ男子の身代わりにするため、生きている女の胎内から子供を探り取る挿話がある。いずれも、他者の力を受け止めるという点で共通性がみられる。院宣の箱がすり替わる挿話も同様である。

『天神記』（正徳四年一月）は道真伝説を踏まえたものである。「夢に魂通ふなどとは女童の俗説」と敵役の時平は扱き下ろしているが、「女童の俗説」こそ近松が支えとするものであろう。「髪は藻屑にかき乱れ」殺された十六夜もま

た海女というべきかもしれない。来日した裴文籍、「日本の阿闍世太子とは己がこと」と豪語する荒藤太からも異国性がうかがえる。

『持統天皇歌軍法』（正徳四年夏以前）は女性天皇の後継問題を描く。近松は持統天皇の名高い歌「しろたへの…」から白い布の城を構想している。城と白、堅固なものと柔らかなものを同時に生み出す歌言葉は近松の作劇において軍事的な法となるのである。それは女性権力と呼ぶべきものかもしれない。日蝕に誕生した皇子を避けるところにはアマテラスの面影がうかがえる。近松において天皇制とは女性的な権力形態なのである。

『相摸入道千疋犬』（正徳四年秋以前）は犬公方綱吉を踏まえつつ、執権北条高時を描く。相摸入道高時は由井が浜で千疋の犬を飼っている。新田義貞の弟脇屋義助（里見義助）は猛犬を放たれるが、かえって犬に助けられる。佞臣宗重が犬に噛み殺されるという結末はすばらしい。猛獣使いとしての近松の本領がよく現れているからである。おそらく本作は馬琴の『開巻驚奇侠客伝』などに影響を与えているはずである。狂女に扮したやよ梅が親王を櫃に閉じ込めて助ける場面も、その証拠となる。

『釈迦如来誕生会』（正徳四年秋以前）は釈迦の誕生から涅槃までを描く。興味深いのは蝶による懐胎である。「やしゆたら女の御袖に飛入ル」と語られるが、『日本振袖始』における袖の隙間が何を意味しているかは明らかであろう。狩猟の罪が語られ、人肉をめぐる裁判のごときものが始まる（『ベニスの商人』のように）。

『娥歌かるた』（正徳四年九月以前）は正徳四年一月に起こった奥女中と役者の密通事件を『平家物語』の世界に置き換えている。安徳天皇が将軍家継、中宮が月光院、平重盛が間部詮房、滝口横笛が絵島生島に当たる。鳥尽くしがあり、死を迫る女権力者の造型が興味深い。結果は籠の中身が置き換えられて、助かるのである。それぞれの欲望が明らかになる「歌かるた」の場面もすばらしい。

全集九

『嵯峨天皇甘露雨』（正徳四年九月以前）は嵯峨天皇に謀反を企て敗北する大海原王子を描き、最後に空海が甘露の雨を降らせる。油を絞り取ったり油の壺から甦ったりする場面が出てくるが、油とは近松的な液体であろう。甘露の雨

とは情動化されて粘り着くような液体にほかならず、油の地獄ではなく油の極楽が現れる。そのとき息子夫婦から父が生まれたり、転生を繰り返していた霊魂が往生を遂げたりする奇跡が起こるのである。後に『浦島年代記』で仙人譚の時間が活用されるとすれば、本作品では仏教的な輪廻転生の時間が活用されている。興味深いのは、子を失った女と父を失った女が連れ立って巡礼に出るところである（「四国へん路」）。本来ならば仇同士の二人だが、男を失ったとき、対立の論理は成り立たなくなるのである。牛の代わりに女たちに車を引かせる大海原王子はサディストにほかならない。

『弘徽殿鵜羽産家』（正徳四年九月以前）は『源氏物語』を題材とするが、出産譚であり裁判物である。藤壺殺しの犯人として刀の持ち主が処刑されるが、実際の犯人は別にいる。犯人である伊賀介が母親のことを思って殺人に加担していた点には近松的な作劇法がうかがえる。刀の持ち主として処刑されたはずの新左衛門が酒瓶に隠されていたという設定は『嵯峨天皇甘露雨』の油壺の変奏であろう。出家を決意した天皇が出御するところは、当然のように女装である（「花山院みち行」）。藤壺の恨みが解けると弘徽殿は皇子を出産するが、それは変成男子であって、もともとは女性なのである。

『賀古教信七墓廻』（上演年月未詳）は土蜘蛛となった母の呪いの物語ともいえる土俗的な傑作である。本作に古浄瑠璃のエネルギーが流れ込んでいることが指摘されるが（渡辺保『近松物語』）、蜘蛛がその象徴であろう。蜘蛛となった継母が孫娘を食い尽くす場面が恐ろしい（「祖母様に噛まれし傷…」）。材木を運ぶ船の難破から始まり、孝房、教信の兄弟に次から次へと不幸な事態が訪れる（難破から始まる『ベニスの商人』のように人肉まで出てくる）。僧籍に入るべきだった孝房は傾城に入れ上げ公金を使い込んで逃亡し、教信は父の仇を討つため旅立つ（「さくら祭文」）。興味深いのは中山寺の場面である。孝房の妻が殺されると、亡骸から子供が生まれ妻の亡霊は男に取り憑く。したがって、男の出産のようにみえる場面なのである。傾城に狂った孝房の息子真光は傾城を買えば救われると騙される。真光の七墓廻りはいわば地獄廻りの道行だが（「夏野のまよひ子」）、それでも地蔵菩薩は掬い上げてくれる（「鉢たたき」）。兄に代わって僧籍に入る弟の賀古教信という名前は過去を背負った信仰の証しにほかならない。

『枹狩剣本地』（正徳四年）は宝剣を賜って紅葉で名高い戸隠山の鬼を退治する平惟茂話を描く。ともに惟茂に恋す

る二人の女の喧嘩がすばらしい。男抜きの世界における女の活劇が見事だからである。その間に宝剣は行方不明になる。「信濃くだり」は二人の女の道行であり、鬼を退治するとき、宝剣の由来を語るのは殺された女の亡霊である。女は夫を更正させるため子供を犠牲にするのだが、夫に殺され宝剣を咥えて飛び来たったという。それが剣の本地である。

『国性爺合戦』（正徳五年一一月）は明の鄭芝龍と長崎平戸の田川七左衛門娘の間に生まれた鄭成功の活躍を描く。主人公和藤内は和でも唐でもない宙吊りの人物である。韃靼王に内通した佞臣李蹈天の謀反で、皇帝は首を刎ねられる。忠臣呉三桂は敵弾に倒れた后の胎内から王子を救い出す。呉三桂の妻は皇帝の妹栴檀女を連れて逃げ、平戸の浜に漂着する。帝国の危機を知った和藤内は両親とともに明に渡る。明には父親が残してきた娘錦祥女がおり、五常軍甘輝の妻となっている。どうしても甘輝を味方につける必要があるので、和藤内は城に乗り込む。自ら死を選んだ錦祥女のおかげで味方となった甘輝は、和藤内に国性爺の名を贈る。国性爺の母親も自害するのだが、ここからは強烈な女の力がうかがえる。胎内から救い出された王子は永暦皇帝となり、国性爺は韃靼王を捕らえ、李蹈天を処刑する。

全集一〇

『国性爺後日合戦』（享保二年二月）は『国性爺合戦』の後日譚であり舞台は中原の国だが、その両端に韃靼と日本が位置する。一方にあるのは動物の国韃靼、他方にあるのは女性の国日本といえるだろう。韃靼の王子に襲撃されたとき、皇帝の身代わりになるのは皇女栴檀女である。韃靼の周辺には羊がおり、女性も羊のように殺される。日本に渡った国性爺の父親はほとんど活躍することがない。近松において父親は虚しく死ぬ。活躍するのは日本に渡った女性のほうである（「錦舎夢路の道行」）。金剛山の秘水が示すように、日本は女性的な領域といえる。もちろん、伊勢神宮にも参拝している。結末で国性爺が力を発揮するのは天から栴檀女を受け取るときである。

『聖徳太子絵伝記』（享保二年一一月）は聖徳太子と物部守屋の対立を描く。守屋の母は改心して自害する。対立していたはずの守屋までが聖徳太子を讃えて自害する。これが近松の仏教なのである。梵天王は聖徳太子に巻物を見せているが、近松において絵は情動的な媒体といえる。

『日本振袖始』（享保三年二月）はスサノオの大蛇退治を描く。最初スサノオを支配していたのは木花開耶姫と岩長姫である。だが、スサノオは稲田姫に向かって歩みを進める（「素箋嗚尊道行」）。スサノオが熱の籠もった袖を切り裂いて娘を助けたところから、振袖が始まる。結末の「大蛇がそびらを腹の内よりさらさらと切さばき、いなだ姫朱に成て顕れ出」と対応しているが、これが文明の開始を告げる身振りなのである。巨旦蘇民兄弟の遺産争いは文明以前における自然の抗争にしかみえない。

『曾我会稽山』（享保三年七月）は会稽の恥を雪ぐという故事により曾我兄弟の仇討ちを描く。鹿をめぐる女たちの口論で始まるが、それを収めるのは怪力の巴御前である。「釣おろし釣あげし」とあり、朝比奈とその母巴御前の力比べもすばらしい。曾我兄弟を招き寄せ恋人たちと結婚させるのも、母の力である。その老母を馬に乗せて富士の狩り場に進む（「虎少将道行」）。昼八つまでに計画を伝えなければならないが、鐘が一つ飛ばされ九つが八つに聞こえる。頼朝が鎌倉に戻るのは夜中の八つの予定だが、雨が降れば明朝五つまで延期されるなど、本作には時間とともに進むサスペンスがある。

『傾城酒呑童子』（享保三年一〇月）は『酒呑童子枕言葉』の改作だが、第四段には女が折檻される場面がある。「だい所の大こん一本もてこいと、又五ッ六ッつづけ打うたれて雪のはだか身も、きへぎへとこそ成にけれ」。こうした折檻によって近松の言葉は強度を増していくのである。

全集一一

『本朝三国志』（享保四年二月）は光秀の謀反と秀吉の朝鮮出兵を描く。信長から恥辱を受ける光秀はマゾヒストの面影があり、草履取りをしていた秀吉も同様である。したがって、両者には関連性がみられるのであって、光秀の死と秀吉の誕生はいわば同じ出来事なのである。その変容を促すのは、光秀の養女お通の犠牲であろう。直後に異国への出兵が行われる（「大将住吉まふて」の戦勝祈願）。「男神功皇后」と讃えられているが、共同体の完成と外部への出兵もまた同じ出来事だといえる（去勢として耳切りが行われるのも近松的な出来事であろう）。

『平家女護島』（享保四年八月）は『平家物語』を題材としている。清盛は俊寛の妻東屋に恋慕するが、東屋は自害す

る。流人となった俊寛は成経の愛人千鳥を助けるため自らは島にとどまる。流人たちが帰還するのが「舟路の道行」である。しかし、法皇を助けた海女の千鳥も清盛に殺される。熱病にかかった清盛は、東屋と千鳥の亡霊に悩まされて死ぬ。題名は常磐御前の男漁りに由来する（「お精のつよい…」）。それは情報収集のためであったと明かされるが、むしろ母権制というべき近松的な権力を暗示している。なお、森山重雄『近松の天皇劇』は、海女について「廓の女の対極にある労働する女のエロス」の表現者と述べる。

『傾城島原蛙合戦』（享保四年一一月）は京の遊郭島原を舞台としつつ、島原の乱を取り込んでいる。「蛙息を吐て虹と成」というが、虹こそ宙吊りの物体であろう。「肌にひつたりと四足をはつて肉をしめ」る平面蛙は、まさに虚実皮膜の上にある。仏像を踏むかどうかが宙吊りの状態を出現させ、踏み絵は足の官能性を際立たせる。二人の女による九州への道行が「旅の素足」である。天草四郎を倒すのは女たちにほかならない。「邪法をひろむる異人ひそかに諸人をなづけ徒党を結び、王法をかたむくべし」というように秘密結社が想像力を刺激するが、近松は異国人の力を招き寄せつつ活用するのである（『大職冠』『天神記』『国性爺合戦』など）。

『井筒業平河内通』（享保五年三月）は『伊勢物語』を題材としている。登場する女性たちは、それぞれ象徴的な意味合いをもつ。二条后は守るべき神聖なものであり、井筒姫や紅梅はその身代わりになるべきものである。しかし、実際に身代わりになるのは有常北の方にほかならない。興味深いのは伊駒姫の祖母の力であろう。業平を婿にして、伊駒姫の叔父を味方につけようとする。題名は水平の軸と深さの軸を示している（それぞれに「なり平歌念仏道行」と「おんりやうふり分髪」が対応する）。業平に変装した伊駒姫は、叔父に殺され井戸に沈められる。井筒姫も井戸に落下するが、伊駒姫に助けられる。「伊駒姫の化したるすがたゐづつ姫をちうに引さげ、こつぜんと顕れ出」。深さの犠牲になったのは井筒姫ではなく伊駒姫のほうである。

『日本武尊吾妻鑑』（享保五年）は女装したヤマトタケルを描くが、その残酷さは近松的な女性の特質といえる（「まそつと殺してみたし、逃げ残りの東夷はないか、探して来う…」）。ヤマトタケルの兄大碓尊は不孝不仁の皇子だが、自ら目を抉って女性的なユートピアを実現するのである。それが妻の鏡ということになる。「下主下郎の賤の女でも、女は氏なふて玉の輿、次第に出世しへあがるこそ身のほまれ」とあるが、男が制度的に固定されているのに対して、

女には流動的な力が備わっている。

全集一二

『唐船噺今国性爺』（享保七年一月）は福建省台湾を舞台にしており、朱一貴が今国性爺として活躍し、六安王を討ち取って即位するまでを描く。この作品では父親のイメージが粉々になる。福建第一の忠臣欧陽格子は五体を切り刻まれ塩漬けにされるからである。息子の欧陽鉄は父親には従わない。一貴も父親の鍛冶職を継ぐ気はない。一貴が感謝しているのは、自らの髭に髪を継ぎ足してくれた母親のほうである。父親は妻が不義を犯したと誤解して刺し殺し、自らの首を掻き落とす。妹とともに旅する一貴は父親のイメージから遠ざかっていく（「旅の菅簑」）。欧陽鉄が顔を朱に染めるのは、父親との類似を否認するためであろう。最後は口にねじ込まれた父親の肉醤を飲み込むのである。

『浦島年代記』（享保七年三月）は安康天皇の後継問題を描く。足が不自由だという設定に天皇の女性性が見て取れるが、天皇は懐妊中の后に対して位を譲ろうとしている。やがて雄略天皇として即位するのは弟宮の泊瀬王子であり、その世話をしていたのが浦島太郎である。浦島の妻は恐ろしい異類であり（「こはや情なや鬼に成た…」）、近松的な女性造型がみられる。天皇の后にも恐ろしい異形性があり、弟宮を誘惑している（「引よせだきしめ給ふ濫行…」）。異類であるがゆえに酒好きなのである。そこに存在しているのは圧縮された時間といえる（「竜宮七世の鏡」）。「おのが母犯せる罪、おのれが子犯せる罪」は圧縮された時間ゆえに生じるようにみえる。

〈近松の世話物〉全集四

『曾根崎心中』（元禄一六年五月）は元禄一六年四月に実際に起こった事件を題材にしており、天満屋の遊女おはつが観音廻りをするところから始まる。醤油屋平野屋の手代徳兵衛は大事な金を九兵次に貸したが、返してもらえず、おはつとともに心中を決意する。二人で曾根崎の天神の森まで歩くのが道行である。

『心中二枚絵草紙』（宝永三年二月以前）は『用明天皇職人鑑』の余韻から始まる。主人公の弟は盗んだ金を神酒徳利

に隠す。それは父親が預かっていた共同体のお金である。たまたま神酒徳利を振ってお金を手に入れた市郎右衛門は盗んだと疑われ、遊女のお島と心中を決意する。弟を改心させるのはお島の力である。本作の二人は別々に息を引き取る（「ちしごの道行」）。しかし、『職人鑑』の壮大なスペクタクルが市井の二人にも虚構の虹をかけている。改心した弟が死体を背負い立ち去ったために、生きているかにみえるからである。それが「生死二枚の絵草紙」となって題名の由来となる。

『卯月紅葉』（宝永三年夏）は夫を探す妻おかめの廿二社廻りの場面から始まる。心斎橋筋の古道具屋長兵衛の甥で、婿養子になった与兵衛は、長兵衛と折り合いが悪く、家出していた。与兵衛は譲り状のことで、長兵衛の妾ゐまとその弟伝三郎に騙される。店に戻った与兵衛は蔵に隠れるが、そこで一服したために放火犯かと疑われる。おかめと与兵衛は死を決意して梅田堤まで行く（「末期の道行」）。与兵衛の母、自らの亡母、伯母への不孝を思ったおかめは死ぬが、与兵衛は生き残る。卯月の紅葉とは、まず燃え上がる火のイメージであり、次に心中の血のイメージであろう。

『堀川波鼓』（宝永四年二月以前）は妻仇討ちを描く。おたねに横恋慕する床右衛門のせいで、おたねは夫の彦九郎が江戸詰めで不在の間に源右衛門と不義を犯してしまう。おたねの妹は姉を助けるため、彦九郎に結婚を迫るが、姉は自害する。京都堀川で彦九郎一行は源右衛門を討つ。酒に乱れたり妹を激しく打擲したりするところに、おたねの一面が見て取れる。

『卯月の潤色』（宝永四年四月）は『卯月紅葉』の続編である。盲目の伯母が長兵衛、ゐま姉弟を杖で打ち据えるところがすばらしい。主人公はその伯母から与えられた白縮緬で死ぬのである。一周忌が近づいた頃、おかめの亡魂が現れるが、これは『卯月紅葉』上巻で占いの神子に乗り移った与兵衛の魂に対応している。

『五十年忌歌念仏』（宝永四年七月以前）はお夏清十郎の物語を題材とする。姫路但馬屋の娘お夏は許嫁との結婚が間近だが、実は清十郎と密通していた。傍輩の勘十郎は清十郎の父親を騙し、同じく傍輩の源十郎は二人の関係を密告する。清十郎はお夏と衣装を交換して別れた後に、勘十郎を殺そうとして源十郎を殺してしまう。清十郎の妹と許嫁は歌比丘尼となって旅するうちに、物狂いとなったお夏に出会い、女たちのトリオが形成される（「道行おなつ笠物狂」）。清十郎は磔される直前に煙管で自害し、お夏は弔うことになるが、勘十郎、源十郎、清十郎の「十」は磔に収

斂するのである。

全集五

『心中重井筒』（宝永四年一一・一二月頃）の舞台は紺屋である。その入り婿はおたつという女房がありながら、兄の営む色茶屋重井筒の遊女のおふさに入れ上げている（「かへりこん屋の徳兵衛…」）。おふさは金が整わなければ京にいられなくなる。徳兵衛は咄嗟におふさを炬燵に隠すが、兄夫婦はわざと火気を強くする（おたつと炬燵は韻を踏む）。おふさ徳兵衛が道頓堀の芝居町を抜けて進むのが「道行血汐の朧染」である。高津の大仏殿勧進所で徳兵衛はおふさを刺し殺した後、井戸に落ちて死ぬ。ここには垂直の力学が働いている。

『丹波与作待夜のこむろぶし』（宝永四年末）は母恋い物といえる。乳母滋野井は、「道中双六」を見せ関東に嫁入りするのを厭がっていた姫君の機嫌を直した馬方三吉が自分の息子であることに気づくが、名乗ることができない。与作は馴染みにしていた小万の父親に金が入り用となり、関の宿で三吉に金を盗ませる。失敗した三吉は恥を感じ人を殺すが、そのとき与作は三吉が自分の息子であることに気づく。伊勢街道の関から窪田まで進むのが「道行与作小まん夢路のこま」である。姫君の慈悲により、罪が許され、「与作おどり」を踊って喜ぶ。父親の意見は息子に否定的にしか作用しない。大事なのは母親の慈悲なのである。

『心中刃は氷の朔日』（宝永六年盆以前）は遊女小かんの叔母が鍛冶屋で働く平兵衛に懇願するところから始まる。もともと小かんは播磨の鷹匠頭の娘であったという。だが、小かんを身請けするだけの金は平兵衛にもない。国もとに戻るようにという説得の手紙が母親から小かんに届くが、平兵衛と別れるつもりはない。神明宮近くの藍畑まで進むが「道行平兵衛小かん夜の朝顔」である。小かんは母の手紙を口に入れて、平兵衛に死を促すのである。

『淀鯉出世滝徳』（宝永五年末または六年新春）は宝永元年冬に起きた淀屋辰五郎の闕所追放事件を題材としている。財産を没収され追放の身となった江戸屋勝二郎は遊女のあづまに入れ上げ、手代新七の諫めを聞かなかったことを後悔する。三国境の板橋から奈良街道を長池まで進むのが「あづま勝次郎初もめん」である。木辻の山城屋に身を売っ

たあづまに、身請けする客が現れるが、あづまは勝二郎のために刺し殺す。しかし、その客は新七の弟であった。勝二郎は新七に踏み付けるよう泣いてわび、そこへ闕所追放が許されたという知らせが届く。

『心中万年草』（宝永七年四月）は高野山を舞台にした心中物である。高野山吉詳院に小姓久米之介の国もと播州飾磨から手紙が届くが、それは紙屋の娘お梅からの恋文であった。久米之介が高野山を追放されお梅のもとを訪れると、祝言の準備中である。店の借金のためにお梅は結婚しなければならないが、久米之介のほうを選ぶ。二人が高野山女人堂まで行くのが「久米之介お梅道行」である。久米之介の姉は万年草が萎んだのを嘆き、お梅は母からもらった杯を肌に添えて死ぬ。

全集六

『薩摩歌』（宝暦八年一月以前）は「あねご」が差配する場面から始まる。京屋敷の庭先で、小まんは「諸国鑓じるし」を諳んじる薩摩者を奉公させる。本名を源五兵衛という薩摩者は、僧の修行中におまんと通じたため出奔したと語る。ベッドトリックのせいで奥女中の林が源五兵衛に斬りかかるが、実は小まんの夫三五兵衛で、仇討ちのため女装していたのである。薩摩に戻った源五兵衛は正体を隠し、おまんの住む琉球屋に奉公している。継母は無理矢理、おまんを結婚させようとする。おまんは、痴話喧嘩のせいで正体が知られてしまった源五兵衛を追っていく（「源五兵衛おまん夢分舟」）。源五兵衛は継母に斬りつけようとして、おまんを傷つけ自ら腹を切るが、小まん三五兵衛夫婦が駆けつけて助かる。南蛮外科への期待が生命を宙吊りにしてくれるのである。

全集七

『今宮の心中』（正徳元年夏）は本町橋から瓦町橋までの舟遊びの場面で始まる。手代の二郎兵衛と針子のおきさは深い仲だが、由兵衛は悪知恵でおきさの父親に娘の結婚に関する手形を書かせる。二郎兵衛は手形を破棄するため主人の戸棚に入り、由兵衛のせいで閉じ込められる。大切な家質の手形を破棄したことに気づいた二郎兵衛は死を覚悟し、日野絹に総身を包んで脱出するが、まるで蚕のようである。この後、今宮戎の森まで地名尽しの道行となる（「二

郎兵衛おさき道行」）。そこでは懐かしい地名にくるまっていたのかもしれない。二人はまさに絹の糸で縊死する。

『冥土の飛脚』（正徳元年七月以前）は宝永六年末大坂の飛脚屋で起こった公金横領事件を題材としている。飛脚屋亀屋を取り仕切っているのは後家の妙閑である。養子の忠兵衛は、身請け話のある遊女梅川を気にかける。新町越後屋を取り仕切っているのも女主人である。そこで忠兵衛は大切な公金の封印を切ってしまう。二人で大和新口村に向かう道行が「忠兵衛梅川相合駕籠」である。捕まった忠兵衛が顔を包んでほしいと頼むのは、切ってしまった封印を補償しようとする行為にちがいない。

『夕霧阿波鳴渡』（正徳二年初春）は病気がちの太夫夕霧のもとに阿波の侍客が訪れたところから始まる。阿波の侍客は実は夕霧の子供を預けた左近の妻であった。女性が遊女を身請けするというのが近松の女性的な権力世界なのである。身請けされた夕霧は、駕籠かきとなった伊左衛門とともに左近の屋敷を訪れると、息子源之介を突き返される。夕霧の病状を気遣って、父親と息子は間の山節を語る（「相の山」）。伊左衛門の母親の台詞「此姑が精力で本復てみせふぞ」で閉じられる家庭劇である。

全集八

『長町女腹切』（正徳二年秋）は刀屋で働く半七のもとを遊女お花が訪れ、半七の叔母だと偽って上がり込むところから始まる。そこに実の叔母が現れる。叔母の機転で救われた半七は、因縁のある不吉な脇差を預かる。半七は井筒屋に金を叩きつけるが、それは脇差をすり替えて作った金である。阿弥陀籤で豆腐買いの役に当たったお花には切らずの幸いが転がり込むことになる。駆け落ちした二人が下り舟に乗り遅れ淀堤を京橋まで歩くのが「お花半七道行」である。この乗り遅れのために二人は助かるだろう。長町の叔母がすべての責任を背負って自ら腹を切るからである。夫の伽羅細工屋甚五郎に見つからないよう叔母がお花半七を隠してくれた空長持は母胎の等価物といえる。

全集九

『大経師昔暦』（正徳五年春）は実家の窮状を救うため犠牲になることを覚悟した女性の話である。ベッドトリックの

せいで不義密通を疑われた京大経師の妻おさんは手代の茂兵衛とともに逃避行する。茂兵衛の故郷柏原で捕まった二人は刑場に引かれていく（「おさん茂兵衛暦歌」）。最後に僧侶が登場し、衣の徳で二人を助ける。おさんの代わりに犠牲となってしまったのは下女の玉である。茂兵衛は二人女性に支えられていたことになる。暦は不可逆的時間と循環的時間を刻むが、二人の女性がそれに対応している。

『生玉心中』（正徳五年五月）は柏屋の遊女おさがが道頓堀から天満天神まで花屋植木屋を見て回るところから始まる（「社めぐりの道行」）。父親の勧める従妹との結婚を断った嘉平次は勘当されており、姉の説得にも耳を傾けない。二人が三日三晩彷徨った挙げ句、生玉神社をめざすのが道行である（「嘉平次おさが道行」）。二人は玉のように虚しく転がってばかりいる。父親の説得に乗ったふりをしてもらい受けた祝い酒の瓢箪から、虚しく転げ落ちた一分金のようである。

全集一〇

『鑓の権三重帷子』（享保二年八月）は、不義を疑われたおさゐと権三が、おさゐの夫市之進に伏見京橋で討たれる話である。ここでも女が権力を握っている。茶の湯伝授の巻物を見せるのはおさゐだからである。しかも、女のほうが年上である。『大経師昔暦』の場合は衣の徳で助かっていたが、本作では重ね帷子によって葬り去られることになる。

『山崎与次兵衛寿の門松』（享保三年一月）は、母親が息子のため遊女に懇願する場面から始まる。だが、大坂新町の遊女あづまにはすでに約束を交わした男がいる。それが山崎与次兵衛である。あづまの好意を受けた与平は、後に二人のため身請けの金を用意することになる。だが、あづまの好意に預かれない彦八は与次兵衛を訴える。狂乱した二人による道行となる（「与次兵衛あづま道行」）。「鬼か天魔か、此の剃刀で人の男に死ねとは」と反発した与次兵衛の妻お菊までが、二人を支えている。道行に「蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず」とあるが、菜種は近松的な液体といえる油の原料にほかならない。

『博多小女郎波枕』（享保三年一二月）は密貿易の海賊を描く。惣七は博多の小女郎を身請けしようとしていたが、海賊のせいで無一物となる。そこで小女郎は毛剃九右衛門に頼む。しかし、毛剃こそ密貿易で長者になった人物であり

（「長者きやう」）、惣七を仲間に引きずり込む。息子に符牒を合わせる父親も弱々しい。悪事に加担してしまった二人は四日市をめざして逃亡する（「惣七小女郎道行」）。追分で駕籠を乗り換えた途端、惣七は細引網にかかり、自害する。天皇の即位による大赦で、小女郎は放免となる。犯罪に巻き込まれるサスペンス、網による捕縛、唐突な恩赦が近松を特徴づけている。

全集一一

『心中天の網島』（享保五年一二月）は天と地の間で橋の力学が働いているようにみえる。天満の紙屋治兵衛にはお三という女房もいるが、曾根崎の遊女小春と深い仲である。小春とお三は互いに心配し合っており、女たちの絆が見て取れる。治兵衛の兄もお三の父も男たちはそこから排除されている。治兵衛と小春が橋を眺めながら進むのが「名残の橋づくし」であり、網島で心中する。治兵衛は瓢箪のようにぶら下がっている。

全集一二

『女殺油地獄』（享保六年七月）は大坂北の新地の遊女小ぎくが客とともに舟で野崎参りをするところから始まる（「道行水馴竿」）。天満の油屋河内屋の次男与平は小ぎくをめぐって客と乱闘となる。泥だらけの与平を助けたのが同町内同商売の豊島屋の妻お吉である。父親を足蹴にした道楽息子は、油まみれになりながらお吉を殺害し、大金を奪う。つまり、本作は泥と油の活劇なのである。

『心中宵庚申』（享保七年四月）は庚申の夜が舞台となっており、姑と女房の仲が良くないのを苦にした主人公が女房とともに生玉門前で自害する。二人が生玉馬場先の大仏勧進所まで歩くのが道行である（「八百屋半兵衛女房お千世道行」）。「母殺すか女房去るか」という台詞には、残酷な母を見て取ることができる。しかし、この母は何一つ生み出すことなく破壊するばかりである。享保の改革の苛烈さがここに現れているのかもしれない。